

鷺塚さんは真剣な目をして、キャンバスを睨んでいた。それが俺の体にも向けられる。俺はベッドの上でポーズをとり、モデルになっていた。しかも何も着ていない姿でだ。一糸まとわぬ姿で俺はベッドの上で横座りになって、じっとしている。かれこれ三〇分ほど経つ。

部屋にはエアコンが効かせてあるので寒くはないが、それでもずっとこのままだと、さすがに冷えてくる。鷺塚さんは休憩をとりながら、絵を描いていた。

その申し出があったのは、つい昨日だった。俺と彼女が付き合い始めてから二週間経ったときに鷺塚さんは画廊に遊びに来て言ったのだ。

「レナさんをモデルにして裸婦を描きたい」と。

俺は冗談かと思ったが、そうではなかった。もちろん最初は戸惑った。

そんなこと経験がないし、俺でいいのかとも思った。また加賀さんにばれたら大変なことになる。半分以上断ろうという気持ちが強かったが、なぜか承諾してしまったのだ。鷺塚さんならいいかなと思って。

ただし、描いた裸婦のモデルは俺だということを絶対に公表しないこと。そしてそれを公の場で展示するときは、俺の許可をとること。ネットに流さないことなどを条件として俺は了解したのだ。鷺塚さんはそれでいいから描かせてと言ってきた。

そんなわけで俺は今、彼女の前で全裸になり、ベッドの上でポーズをとっているというわけだった。彼女が描いているのは俺の前面だった。つまりバストも絵が描かれているということだ。最初は恥ずかしかったが、慣れてくると平気だった。

「うん。こんな感じかな」

鷺塚さんは言った。どうやらデッサンが出来上がったようだった。あとはそれに色を付けていく作業だ。それ以上先は俺を見ないでやってもらうか、また後日だ。完成まで全裸でいたら、本当に風邪をひくし、何時間かかるかわからない。

鷺塚さんは立ち上がって、その絵を俺に見せてくれた。鉛筆書きなので、あまりピンとこないが、上手く描けていると思う。

彼女もベッドに上がって、俺の横に座った。

「へえ、これが私ですか」

「まだ完成じゃないけどね。これに色を乗せるのが楽しみだわ」

「私も完成を楽しみにしています」

そういうと彼女は描いたキャンバスを無造作に横に置いて、俺をじっと見てきた。目が蕩けるようになってくる。俺は淫靡な雰囲気を感じてきた。

じた。

そして鷲塚さんは俺の体に手を伸ばしてきて、触れはじめたのだ。

「綺麗……ほんとに綺麗」

そう言いながら、俺の肩から胸のあたりにかけて手で触れてくる。俺は嫌がることなく、されるがままになっていた。少し下半身が熱くなる感じがあった。

そして私の体を抱き寄せてキスをしてきたのだ。その口づけは次第に濃厚になり、俺はベッドに寝かされた。自然な流れだった。俺が全裸になって、絵を描き終わり、「はい、さよなら」なんてことは、あるはずがないと思っていた。必ずこういうことをしてくると思っていたのだ。俺もそれを期待していた。

「はあ、もう我慢できない……」

